

イチゴ幼苗セル成型苗の長期大量生産技術と利用体系の開発

1 中核機関・研究総括者

愛知県農業総合試験場 齋藤 弥生子

2 研究期間

2006～2008 年度（3 年間）

3 研究目的

イチゴの促成栽培では、育苗作業が経営規模拡大のネックとなっている。そこで、ランナーの長期大量発生技術と子株貯蔵技術、子株を 20 日程度の短期間で展開葉数 3～4 枚のセル成型苗に育成する技術を確認し、従来の 5 倍の本ぽ定植用苗の長期大量生産を可能とする苗生産システムを開発する。併せて本システムで育成したセル苗を土耕栽培、高設栽培において利用する技術を構築し、育苗の分業化が可能なイチゴ生産体系を確立する。

4 研究内容及び実施体制

- ① 幼苗セル成型苗の長期大量生産技術の確立（愛知県農業総合試験場、香川大学、兵庫県立農林水産技術総合センター、（株）ベルディ）

ランナーの長期大量発生技術と子株の貯蔵及び短期間でセル成型苗に育成する技術を確認する。

- ② 幼苗セル成型苗利用技術の開発（愛知県農業総合試験場、（独）近畿中国四国農業研究センター、）

幼苗セル成型苗を土耕栽培及び高設栽培において利用する技術を構築する。

5 目標とする成果

幼苗セル成型苗生産システムの開発により、採苗ほ 10a 当たり 50 万株の幼苗セル成型苗の長期大量生産が可能となる。また、幼苗セル成型苗利用の栽培指針が策定される。これにより、育苗の分業化が進み、イチゴ栽培面積の拡大が図られる。また、幼苗セル成型苗の周年供給と利用技術により、イチゴの周年出荷と生産安定が可能になることが期待される。

イチゴ幼苗セル成型苗の長期大量生産技術と利用体系の開発

現状

- ・イチゴは他の果菜類に比べ苗の植付本数が多い
- ・育苗と収穫最盛期が重なる

課題

育苗の分業化が必要

育苗が重荷

対応策

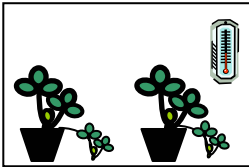
苗の長期大量生産システムの開発と利用体系の開発



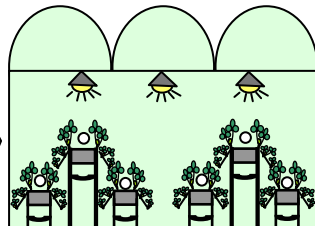
・採苗の効率が悪く、需要が9月に集中
→種苗会社の参入が進まない

開発技術

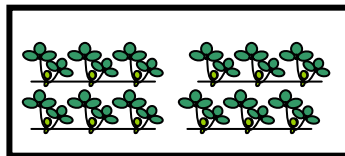
(1) 幼苗セル成型苗の長期大量生産技術の確立



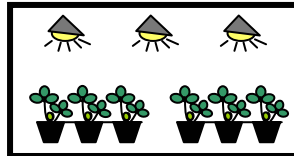
①ランナー発生条件の解明



②ランナー長期大量発生技術の開発



③子株貯蔵技術の開発

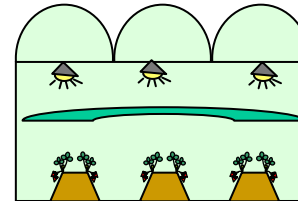


④環境制御による活着・発根促進技術の確立

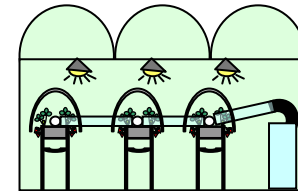
⑤幼苗セル成型苗の生産システム化と経済性評価

結果の
フィードバック

(2) 幼苗セル成型苗利用技術の開発



①土耕栽培における幼苗セル成型苗利用技術の開発



②高設栽培における幼苗セル成型苗利用技術の確立

期待される成果

採苗ほ10a当たり5倍に当たる50万株の生産を可能とする、幼苗セル成型苗の長期大量生産システムの確立と利用体系の開発

育苗の分業化が可能になり、栽培面積の拡大と高生産が実現

